其後、長治、諸城を構へ、櫛橋左京進に、志賀多の城を守らせ、神吉民部少輔は神吉の城、梶原平三兵衛は高砂の城、長井四郎左衛門は野口の城、淡川彈正は淡川の城、衣笠豐前守は、波志谷（はしや）の城を守る。長治及び其弟小八郎治定・彦進（ひこのしん）友行・山城守賀相（よしすけ）、其外上月・中村・高橋・服部・後藤・長谷川・神澤・大村・三枝・上原・魚住・賀古・飯尾・藤田等の輩は、皆三木城に籠る。羽柴秀吉、此由を聞きて曰く、我れ長治を以て、播州の案内者にと思ひしに、反逆を企つる事はいかにぞや。されども亦恐るゝに足らずとて、別所孫右衞門重棟を呼びて問うて曰く、汝も亦反く心あるやと。重棟、涙を流して物いはず。秀吉の曰く、是れ定めて、山城守が所爲（しわざ）ならん。汝即ち書を長治に遣して、其心を察せよと。重棟使を遣して、再三諫むれども、長治遂に從はず。秀吉、さらば三木の城を攻めんとするに、軍兵多からず。小寺官兵衞に問うて曰く、何れの所にか陣を取らんと。小寺が曰く、書寫山は僧坊多く、兵糧乏しかるべからず。彼寺に陣取りて、信長の加勢を待ち給へと。秀吉、即ち書寫山に入りて陣取る。寺僧等恐れて逃げ隱るゝ。秀吉宣はく、彼僧法師等に何の咎あるや。若し殺害せば、曲事たるべしと。斯くて野口の城を攻めらるゝに、城主長井忠左衞門降人に出でて、城は落ちたり。是より先に、長治と毛利輝元と同心す。是に於て、輝元より吉川駿河守元春・小早川左衞門佐隆景を遣し、宇喜多直家が兵を合せて、長治が加勢とす。其軍勢凡そ五六萬騎、上月の城を取卷く事、十重廿重なり。城主山中鹿之助、即ち秀吉に加勢を乞ふ。秀吉、即ち小寺官兵衞等を遣して、高倉山に陣を取らしめらる。吉川元春・小早川隆景、多勢なるを以て、軍兵を二に分けて、一は城を攻め、一は秀吉と戰はんとす。秀吉飛脚を立てゝ、信長に告げたり。信長、即ち嫡子信忠を大將として、佐久間右衞門尉信盛・瀧川左近將監一益を差添へ、軍兵一萬五千を率して、加勢し給ふ。大將信忠、既に神吉城に取懸けて攻めらる。城主神吉民部、之を防ぐ所に、民部が一族神吉藤太夫、既に大將民部が首を切つて、降人に出でつゝ城を開渡す。茲に至りて信忠歸り給ふ。初め信忠、京を打立ち給ふ時に、父信長も、押續きて打立ち給はんとせしかども、羽柴秀吉の武邊の譽を猜む者共、信長を止め奉る。是れ秀吉を、敵に追捲らせんとする爲めなり。或日毛利輝元が加勢の兵、野

毛利輝元と戰ふ

伏を出して、秀吉の草刈を殺す。秀吉の兵共、野伏を打殺す。是に於て、毛利方より軍兵大に出でて戰ふ。秀吉の兵尾藤・戸田、眞先に進みて疵を蒙る。宮田氏某は、討死しける程に、秀吉の軍開き靡きて、既に敗北せんとす。竹中半兵衞重治之を見て、軍兵を引取る。此時、信長の使者又來りて、秀吉早々引退くべしとあり。秀吉力なく、書寫山に歸る。山中鹿之助大に力を落して、毛利方に降人に出でけるを、遂に誅しけり。秀吉、卽ち信忠の家に行きて曰く、後詰の援なき故に、上月の城落ちて、鹿之助殺されたり。是れ公の過なりと。信忠深く恥ぢて、軍兵を集め、三木の城を攻干さんとて、八月に、城の邊に赴き、秀吉を平山に陣取らせ、信忠、京に歸り給ふ。十月に、長治・賀相等評定しけるは、敵の勢は僅に三四千、味方は七八千なり。此多勢にて、小勢に取圍まれん事は、誠に口惜しからずや。城を出でて勝負を決せんといふ。諸人皆然るべしと同ず。則ち軍兵を出して、平畠といふ所に陣を取る。山城守賀相・小八郎治定、大將たり。中村孫平次が城に取懸けて攻めける所に、秀吉後詰せらる。賀相・治定等此由を見て、中村を打捨てゝ、秀吉に攻懸る。

秀吉の先陣、備を亂して危し。秀吉の弟羽柴美濃守秀長（後に大和大納言と號す）大に戰うて、賀相・治定が陣を破る。秀吉、押續きて攻め戰ふ。敵軍の中に、久米五郎久勝・志水彌四郎直近等、皆討たれて、敵兵大に亂れしかば、山城守賀相は、逸足の馬に策（むち）を打ちて、城中に逃籠る。治定は討死す。樋口太郎、其首を取る。長治等は、丹生山に城を構へて、毛利家よりして、兵糧を運び入るゝ。秀吉急に攻められければ、兵糧を入る事叶はず、三木の城に取入るゝ。其後毛利輝元・小早川隆景は、三木の城を救はんとて、數百艘の兵船を漕出して、明石の魚住に着く。秀吉之を聞きて、三木と魚住との道を取切らん爲めに、君が峯を取圍み、子城卅餘箇所を構へ、塀を附け堀を深くして、兵を入れて守らせらる。玆に至りて、三木と魚住との通路、絶果てにけり。同七年の春、別所長治軍兵を出して、秀吉の一子（ひとつご）の城を攻むる。此城には、古田吉左衞門・神古田半左衞門・中西彌五作三人、大將として守り防ぐ。古田は箭に中りて死す。長治が兵も多く討たれ、又は疵を蒙りしかば、城に引返す。

三月、信忠大軍を率して、重ねて播州に至り給へば、秀吉の陣を、三木の城下近き邊

に移さる。城中更に追拂ふ事能はず。

四月、信忠、都に歸らる。秀吉の臣下竹中半兵衞重治は、武勇智略の名臣なりける。重き病に罹りて、醫療術を盡せども效なし。京へ上せて養生せさするに、微は驗あるに似て、大なる效なし。重治が曰く、軍陣の中に死するは、武士の望む所なりとて、播磨の平山の陣に歸り、六月に、遂に死にけり。年未だ卅六。秀吉、大に歎き惜まれたり。

九月、別所長治軍兵を出して、谷大膳衞好が守る所の陣に押懸けて、急に攻めければ、衞好防ぎ戰ふに、力盡きて討死す。秀吉此由聞きて、旗を進めて打たんとす。別所山城守賀相、三千餘騎にて、大村の前に陣取る。秀吉、僅に三百餘人を、魚鱗に備へて駈入りつゝ、短兵急に取拉ぎ、突伏せ切倒し、四角八面に追捲くる。山城守駈立てられて、遂に敗北し、討たるゝ者六百餘人なり。是より城中大に恐れて、欺き難く思へり。其上に城中兵糧乏しく、糟糠を食ひ、犬鷄を殺し馬を刺殺して、之をも喰ひ盡し、後には死人の肉を、爭ひ分ちて喰ひける程に、餓死する者數を知らず。秀吉の軍兵は、いよ〳〵氣に乘り、城中の兵は、日に從うて弱り衰ふ。

同八年正月。秀吉、秀長、既に三木の城を攻めらるゝに、城中の兵、毎日に討たるゝ者多し。日數經て、長治、其弟彦進友行を呼びて曰く、此城既に兵糧乏しく、軍兵疲れ、防ぎ戰ふに力衰へ、城の危き事纖の如し。久しく有つ事叶ふべからず。今夜我れ自害して、城中に殘れる軍兵共の、命を助けばやと思ふはいかに。然らば先づ、寄手の方へ此由告げて、其返事に依りて相計らはんといふ。友行、卽ち書を認めて、淺野彌兵衞長政に遣して曰く、天運既に逼り、長治・賀相・友行等自害せんとす。城中に殘りける軍兵以下、此等を殺されなば、不仁無慈悲の至なるべし。若し憐みて助けらるれば、我等の喜、之に過ぐべからずとなり。淺野彌兵衞此由申すに、秀吉うけがひて、酒肴を城中に送り遣さる。長治大に喜びて、上下の軍兵等殘らず召寄せ、最後の酒宴を致し、十七日の早天に、長治出でて、垢離をかき香を焚きて、彦進友行を使として、山城守賀相にいはせけるは、城中兵糧盡きて、軍兵疲れたり。我等死して、彼等を助けんと思ふ。只今自害すべし。同じ道に伴ひ申さん、必ず後れ給

ふなよとあり。賀相が曰く、我輩空しくなりて、軍兵共の死なざらんには、益もなき事なり。城中の軍兵と、同じく死すべしといふ。城中上下の兵共、皆怒りて曰く、賀相僞を構ふ。賴もしげなき人に向つて、誰か命を捨つべきとて、賀相を殺さんとす。賀相櫓に上りて、火をかけて城を燒崩さんとす。家人等押詰めて、賀相を刺殺す。斯くて長治、先づ妻子を刺殺し、我が身も自ら首搔落して死す。年廿三。彥進友行も自害す。年廿一なり。三宅肥前治忠入道は、長治が舊好の家老なり。同じく自害す。秀吉其の首を取りて、皆信長に送り奉りてより、播州平かに治まり、秀吉、三木の城に移り居せらる。

月日幾干ならずして、家人數千間城下に立續けて、軒を爭ふ。誠に政德仁慈のしるしなりと、人皆驚き感じけり。是よりして、但馬・備前・美作、皆附從ふ。其外西國・四國の人民、何れも秀吉の風を望まずといふ事なし。

小寺官兵衞、既に秀吉に語りて曰く、三木の城は、播州にては傍なれば、某居住の姫路こそ、一國の中央にして、而も四國・九州より京都迄、船の通路も心の儘なれば、播磨を領せん輩は、姫路に過ぎたる住所あるべからずと申す。秀吉、卽ち姫路に移りて、しばしありて但馬に赴き、舍弟美濃守秀長を、國守として居ゑ置かる。

西播磨廣瀨といふ所に、宇野氏某といふ者、城を構へて楯籠りけり。秀吉、之を攻むる事甚だ急なり。宇野、竊に城を出でて、西國に落下らんとす。荒木平太夫追懸けて、之を打取る。

同九年の春、秀吉、姫路の城を作らる。六月廿五日、秀吉大軍を率して、因幡の國に赴き、鳥取の城を攻めらる。城には山名豐國（後に入道して禪高と號す）・吉川式部少輔隆久・森下出羽入道道與・中村對馬守春次が籠りて、守る所なり。（吉川・森下・中村は、毛利が家人なり。）山名豐國、卽ち秀吉に內通して、城を出でつゝ寄手に加はる。吉川・森下・中村、いよ〳〵固く守り防ぐ。秀吉附城を構へ、陣を連ね、日夜に之を攻むる。毛利輝元加勢を遣し、後詰を致さんとするに、兎角して果さず。城中甚だ苦しみて、又兵糧乏しくなり、牛馬死人等を食ひて、餓死する者城に滿つ。命ある輩も、手足なえ、よろめき倒れて、弓をひき太刀を握るに力なし。是に於て、吉川・森下・中村、評議して曰く、今此急難を逃

鳥取城を陷る

れんとするに、落行くべき道なし。網にかゝれる魚の如し。毛利輝元、加勢後詰の約束を違へられ、我等死すべきに極まりとて、福光小三郎を遣して、淺野彌兵衛長政に言送りけるやう、城既に危く、攻落されん事近し。大將三人自害すべし。願はくは殘れる城中の者共の、命を助けらるれば、三大將の喜ならんと。秀吉聞きて其契約をなし、酒肴食物を城中に送らる。吉川・森下・中村大に喜び、城中上下の軍兵共を召集め、暇乞し、酒宴をなして後、自害の時刻を、秀吉に告げ知らせたり。秀吉、即ち堀尾茂助吉晴を、檢使に遣す。吉川・森下・中村は、城を出でて寺に至り、堀尾に對面して、禮儀を致し、各腹切りけり。堀尾、即ち三人の首を取りて立歸らんとす。福光小三郎・坂田孫次郎、二人進み出でて曰く、我等日頃吉川が恩を受けて、今に報ずる事なし。同じく死して之を報せんとて、二人刺違へて死す。秀吉は、此三大將の首を見て、涙を流して、義の深き事を感じ、やがて城中の軍兵共を出して、粥を煮て食せしむ。日頃久しく食に飢えたる故に、俄に多く食ひける者は、皆死しけり。少く食ひける者は、命恙なく、漸々に氣力本服したり。其後五萬石を、宮部善祥坊に差添へて、城代として守らしむ。又伯耆國羽衣石城は、南條勘兵衛之を守り、岩倉城には、小鴨左衞門尉を籠めて、守らしめらる。

十月、吉川駿河守元春、軍兵を率して之を攻むる。秀吉、即ち宮部善祥坊に語りて曰く、今鳥取の城を攻落す。軍兵共、定めて大に疲れぬべし。然れども羽衣石・岩倉を攻落されなば、敵の勢强くなるべし。我れ甚だ憂へ恐るゝなりと。善祥坊が曰く、加勢後詰を出して救ふには如かじと。秀吉、即ち增田仁左衞門を遣して、軍中の事を計らはしめ、秀吉、既に伯耆に赴き、鎧畠といふ所に陣を取らる。吉川元春、引退きて鳥山に陣取る。秀吉、近邊の村里を燒拂ひて、兵糧米を奪ひ集めて、羽衣石・岩倉の兩城に入れられ、必ず南條・小鴨、愼みて城を能く守るべし。敵縱ひ近く攻寄せて挑むといふとも、城を出でて戰ふ事なかれと仰付けられ、秀吉は、十一月に、播磨の姫路に歸らる。

信長、既に秀吉及び池田勝九郎之助を以て、淡路の國安宅木河内守が籠りし由良の城を打たしめ給ふ。安宅木、既に城を圍まれ、力衰へて降人に出でたり。池田之助、

之を召連れ、江州安土に至りて、信長に對面せしむ。秀吉、既に姫路に歸らる。十二月、秀吉、歳暮の御禮の爲め、姫路を立ちて安土に赴き、菅屋九右衞門・堀久太郎を以て申入れらる。信長大に喜び、菅屋・堀を遣して、秀吉にいはしめ給ふ。今年諸所の軍陣に、苦勞いふ計りなし。今は其上の藤吉郎にはあらず、國持の大名なり。明日御振舞給はるべしとなり。秀吉大に謝し申して、安土の城に登られしかば、信長立出でて對面あり。心地よげにおはしぬ。秀吉平伏して罷り出でつゝ、微明に登城あり。國久の太刀一腰・銀千枚・吳服百鞍・蓋の馬十疋・播磨杉原三百束・滑革二百枚・明石干鯛千箇・野里の鑄物色々・蜘蛸三千連を奉らる。山上より山下に至る迄、山に山を積上げたり。信長、殿主より之を見給ひて宣はく、大膽大器者羽柴筑前守が持參の物なりとて、諸人に見せしむ。人皆驚きて曰く、夥しき事、未だ更に見たるためしなし。堆き物かなといへり。信長宣はく、我も遂に、斯の如く大なる捧げ物は見ず。羽柴は、天下無雙の大膽者なり。縱ひ支那身毒を打たしむとも、否とは辭退せじと宣ふ。信長いとゞ快くおはせしかば、近習皆喜ぶ。斯くて信長、出でて秀吉に見え給ひ、厚くもてなして御茶を賜ふ。丹羽五郎左衞門・長谷川丹波守・醫師道三、相伴とす。其後さま〳〵御物語おはして、歸國の御暇給はるに、國次の脇指を下さる。是は備前守信秀の遺物なり。堀久太郎持ちて、秀吉の家に至る。秀吉頂戴あり。

高松城を攻む

同十年三月、秀吉軍兵を率して、備中國に至り、冠城を攻落す。夫より河屋城に取懸けて、攻めんとするに、戰はざる以前に降參す。猶進みて、高松城を攻めらる。要害險阻の名城にて、輙く攻め難し。城主清水長左衞門尉は、聞ゆる名將なり。毛利輝元が股肱の家臣なり。輝元、卽ち難波傳兵衞・近松左衞門に、軍兵二千を差添へて、加勢しければ、城中大に强りて、落つべき色なし。秀吉、卽ち城の有樣を見て、是れ水攻に勝る事あるべからずとて、城の圍三里の間に堤を築き、大河谷水を堰入れしかば、日を重ぬるに從ひて、水漫々と湛へて、大海の如し。堤に添うて、附城を所々に構へ、夜廻晝番怠らず。五月に、小早川隆景・吉川元春、五萬餘騎を率して、釋迦峯不堂嵩に陣を取る。其後毛利輝元三萬餘騎にて、同じ峰に陣取る。城中大に喜ぶ。然れども河水湛へて、城中に通路する事叶はず。秀吉、書を信長に奉りて曰

く、高松の城を攻干さんこと、近きにあり。然れども輝元、數萬の軍兵を率して、城中に加勢せらる。若し軍兵を下し給はらば、夫に高松の城を取卷かせ、秀吉手の軍兵を以て、輝元を打靡かさば、西國は卽時に、平げ鎭めんと申遣しければ、信長、さらば加勢を秀吉に遣さんとて、惟任日向守光秀・筒井順慶・長岡與一郎忠興・池田紀伊守信輝父子・中川瀨兵衞清秀・高山右近等を始として、軍兵都合三萬五千餘騎を遣して、秀吉を助け救はる。毛利右馬頭輝元、既に高松の城を救はんとすれども、秀吉の策に押へられて、進む事能はず。其間に水いよ〳〵重なり湛へて、蛇・蚯・鼠等集り出で、城中にみち〳〵たり。女童は恐れ惑ひて、絕え入る事毎度なり。水既に城を浸すに至りて、城主清水長左衞門、其兄月清入道にいふやう、斯の如くならば、城中、水に溺れ死なん事疑なし。我等自害して、城中の軍兵を助けんと思ふはいかにと。月清入道、我も斯く思へりとて、難波・近松に問ふに、皆然るべしといふ。六月三日、清水長左衞門、書を遣して秀吉に申す。秀吉契約して、酒肴を城中に送らる。清水大に喜び、軍勢に暇乞ひ、酒肴をひろめ、次の日小舟を乞ひて、清水兄弟・難波・近松、之

高松城を陷る

に乘りて堤に向ふ。先づ城中の諸道具、其所々に飾り、書付を壁に押して曰く、我等死して後、秀吉に渡すべしとて、舟に乘りて、城の門外に漕出し、水の上にして、腹切つて死す。秀吉其城を取り、杉原七郎左衞門尉家次を居ゑて守らしむ。

同月三日、長谷川宗仁が許より、飛脚を以て、秀吉に遣して曰く、昨二日の朝、惟任日向守光秀が逆心に依りて、信長・信忠、御生害ありとなり。秀吉聞きて、大に驚かれしかども、更に取亂さず。次日數百騎を率して、陣屋々々を巡り見給ふ。是より先に、毛利輝元、和睦すべき旨申入れ、備中・備後・伯耆三ヶ國を奉らんと、起請文を以て申遣さる。今猶頻に和睦せんと申さる。秀吉、先づ信長の御事に依りて、暫く和睦せんと計り給ふ。既に吉川元春・小早川隆景が使者、又來る。秀吉心に思ひ給はく、信長の事、隱すとも隱し遂げじ。遂には隱あるまじ。只有の儘に語らんと、其の使者に語り給はく、信長公は、明智光秀が爲に御生害あり。それとても毛利、和睦の約を變改あるまじきや。汝先づ歸りて、此由輝元に問ひ來るべしとなり。使者立歸りて申す。輝元、卽ち吉川・小早川等を集めて評議す。或は是非に惑ひて物

いはず、或は只軍兵を安藝に引入れて、時を窺ひ給へといふ。小早川隆景進み出でて曰く、信長の生害は、秀吉の不幸なり。されども秀吉、京に上り、日向守光秀を打平げらるれば、其勢天下に滿ちて、之を防ぐ者あるべからず。只今和睦の約を變改せば、秀吉の恨、骨髓に徹せん。然らば毛利家の滅亡疑なし。されば秀吉は、智略武勇の名將、大膽氣情の强士なり。天下を取るべきは、誰か此人の外にあらんや。今いよ〳〵和睦の親をなし、信長の死去を弔はれなば、秀吉の喜計りなく、是れ毛利家の繁昌ならんと申す。輝元之に從ひ、內藤越前守廣俊を使者として、信長を弔はせられ、又蜂須賀彦左衞門尉正勝を以て、秀吉に申さしむ。信長縱ひ果て給ふとも、和睦の事變改すべからず。輝元及び元春・隆景、更に秀吉に遺恨なしとあり。秀吉大に喜びて曰く、我れ思はく、輝元若し和睦の約束を變せば、宇喜多秀家を茲に止めて、秀吉は京に上りて、光秀を討たんと思ひける所に、毛利其約を變ずまじくば、目出たき首途なりとて、互に起請文取交し、鐵炮五百挺・弓百張・旗三十本を輝元に乞うて、六日に高松を引拂ひ、八日に、姫路に歸る。

輝元と和す

織田七兵衞信澄は、武藏守信行の子なり。信行は、兄の信長に殺されし故に、信澄之を恨みける事、尤も其の根深し。而も日向守光秀が聟なり。此時大坂にありしが、上洛して、光秀に力を合せんとせられしを、信長の三男三七信孝・丹羽五郎左衞門長秀相議して、大坂を攻められしかば、七兵衞信澄、打負けて死せらる。

秀吉は、姫路を立ちて、尼崎に至り、髮を切りつゝ、使者を、三七信孝・丹羽長秀・池田信輝及び其子之助等に遣して曰く、我れ今主君の惡敵日向守光秀を討たん爲に、是迄上りぬと。是に於て皆尼崎に會合あり。池田信輝、入道して勝入と名づく。軍評定ありけるに、勝入、高聲に曰く、先陣は我なるべしと。高山右近進み出でて曰く、山崎の合戰は、次第を以ていはゞ、先陣は某、二陣は中川瀨兵衞、三陣は池田なりと。秀吉曰く、信長公の時、軍立の定め、斯くの如し。今猶其法を守るべしとあり。是に依りて六軍の列定まりて、山崎に押進む。高山は高槻の城主、中川は茨城の城主、池田は有岡・尾崎・花隈の三城を守る。此故に近所より遠所を、漸々後陣に定めし先例を以て、高山斯く申しけり。

日向守光秀、安土の城に行きけるが、明智左馬助を殘して、五畿内を靜めんとて、八幡の近所に、洞が峠といふ所に至り、大和の筒井順慶を招けども、來らず。光秀憂へて、我が二男小阿古を人質に遣しけれども、順慶、遂に來らず。時に日向守光秀は、羽柴筑前守秀吉、播磨の姫路を立ちて、攻上ると聞きて、軍陣の列を定む。山崎の先陣は、齋藤内藏助利三・柴田源左衞門二千餘騎、江州の勢三千餘騎を相副へたり。山手の先備松田太郎左衞門・並河掃部二千餘騎、右の方の備は、伊勢與三郎・諏訪飛驒守・御牧三左衞門二千餘騎、左の方の備は、津田與三郎二千餘騎、次に光秀五千餘騎にて、旗本の備を立てたり。羽柴秀吉の軍兵は、先陣は、高山左近二千餘騎、二陣は、中川瀨兵衞尉清秀二千五百餘騎、三陣は、池田勝入父子五千餘騎、四陣は、丹羽五郎左衞門長秀三千餘騎、五陣は、三七信孝四千餘騎、六陣は、秀吉二萬餘騎にて進みけり。爰に齋藤内藏助は、洞峠にありて、使を日向守光秀に遣して曰く、秀吉大軍を以て押し來る。只同じくは、今日の軍を止めて、坂本の城に籠り給へかしといふ。光秀大に怒りて曰く、主君を殺す事は、なり難きものなり。我れ能く之を

光秀を攻む

なす。何物か此勢に對すべき。汝心易く思ひて、早く爰に來るべしと返事す。

十三日、光秀、山崎に陣取り、松田太郎左衞門を呼びて曰く、汝早く天王山に登り、山崎を直下して、弓鐵炮を敵陣へ打入れさせよと。松田、七百餘人を率して登る。羽柴秀吉は、堀久太郎秀政及び堀尾茂助吉春を遣して、天王山に至らしめらる。敵味方、はしたなく出合ひて相攻むる。秀政能く戰ふ。松田敗北して引退く。然るに先陣高山右近は、山崎の南門を閉固めて、他の軍兵を通さず。光秀が先陣伊勢與三郎・諏訪飛驒守・御牧三左衞門・其弟勘兵衞と大に戰ふ。二陣中川瀨兵衞は、坂を登りて、左より懸り、三陣池田勝入父子は、川を渡して、右より懸る。三陣に押包まれて、光秀が江州の兵、裏より崩れて、伊勢・諏訪・御牧皆討死す。光秀馳向うて、加勢すべきといふ。比田帶刀、之を止めて諫めけるは、此軍味方大に亂れて、大事に及べり。先づ勝龍寺に籠り給ふか、今夜竊に坂本に赴くか、此兩條分別あれといふ。光秀忙然として度に迷ひ、勝龍寺は何方ぞといふ。比田馬を引きて、此方へとて進む。敵軍早其道を取塞ぐ。光秀僅に逃れて、閑道より勝龍寺に入りたり。凡そ今日

の合戰は、中川瀨兵衞清秀、大功の働を以て、日向守光秀が軍兵、一時に敗北せり。織田三七信孝、卽ち清秀が手を執へて、汝の働を以て、敵を切崩して勝軍したり。本意を遂げし大功を、何れの時にか忘れんとありしに、羽柴秀吉其後にありて、輿に乘り乍ら曰く、瀨兵衞々々々骨折々々と申されしを、清秀聞きて曰く、筑前守がなめげなる言葉其の容付、既に天下を我物に呑入れたる氣ありといひけるこそ、誠に能く當れるなれ。

惟任日向守光秀、既に勝龍寺に入りて、其軍兵を見れば、僅に千人に足らず。日暮に至りて之を見れば、何地へか落失せけん、兵只百騎にだにも足らず。光秀、之には中々叶ふべからずと思ひ、夜に入りて勝龍寺を出で、竊に伏見を指して赴き、小栗栖に懸りて、坂本の城に行かんとす。明智庄兵衞・進士作左衞門・村越三十郎・堀毛與次郎・山本仙入・三宅孫十郎、僅に五六騎打連れて落行く所に、野伏共蜂の如く起り、蟻の如く集りて、藪の中より、鑓を以て突くに、光秀が右の脇を、したゝかに刺す。夫より三町計りにして、馬より落ちたり。是は如何にといふ。光秀が曰く、

光秀討たる

先に竹藪の中より出でし野伏に突かれて、腸出でつゝ斯の如し。早く我首を切つて、深く藏せよとて、息切れ空しくなる。明智庄兵衞、其首を取りて、馬轡に包み、溝の中に藏し、屍をも、道の傍なる深田に埋みて、皆ちり〳〵に落失せたり。明智左馬助は、安土城にあり。秀吉攻め來ると聞きて、我れ此城にありても益なし。光秀と一所に死なんとて、山崎に赴く。堀久太郎秀政に行遇うて、大津打出の濱にして戰ふ。左馬助敗北して、坂本の城に籠る。されども軍兵皆落失せて、城を防ぐ力なし。是に於て光秀が子に自然といひしを初めて、子息三人・息女三人を刺殺し、城に火をかけ、我身共に燒死す。

十四日、秀吉、三井寺に至る。小栗栖の里人、惟任日向守光秀が首を持來る。秀吉大に喜び、杖を以て其首を打ちて曰く、君を弑せし天罰早く來りて、斯の如しやと宣ふ。

齋藤内藏助も、江州堅田に落行きけるを、里人生捕りて、秀吉に參らする。秀吉又、光秀が屍を尋ね求めて、彼首を續ぎて、粟田口に磔にかけ、内藏助も、同じく磔にす。

秀吉、船に乘りて長濱に赴く。是れ秀吉の舊領なり。茲に江州淺井郡山本に、安土萬五郎といふ者、光秀に志を通ず。光秀、既に信長を弑すと聞きて、我手の凶賊を率して、長濱の城を攻取りて、籠り居る。光秀討たれたりと聞きて、萬五郎、舟を鹽津・海津に艤して、敦賀に落行かんとす。里人追詰めて、首を切つて秀吉に奉る。秀吉二日逗留して、尾張の清洲に赴く。丹羽五郎左衞門長秀・池田勝入も來る。瀧川左近將監一益は、關東より馳せ來る。柴田修理亮勝家は、越中國にして、長尾喜平次と對陣せしが、信長の事を聞きて陣を引拂ひ、京都に攻上らんとせし所に、羽柴秀吉、早光秀を討ちたりければ、同じく清洲に至り、秀吉・長秀・勝入等と評議して、信忠（信長の長男）の息三法師を、信長の世繼とし、闕國を分ち領す。信雄卿（信長の二男）には尾張國、信孝には美濃國、秀吉には丹波國、勝家には近江國長濱、池田父子には大坂・尼崎・兵庫、長秀には若狹國及び近江國高島・滋賀二郡、瀧川一益には五萬石、蜂屋出羽守には三萬石、是れ皆所領を加增せらるゝ所なり。三法師殿を安土山に移し、長谷川丹波守・前田玄以齋を、御守に附け、近江國にて、三十萬石を以て御厨料とす。三

秀吉勝家不和

法師殿御幼稚の間、信雄卿を御名代とす。此時柴田勝家、大に其心驕りて、物申す言葉も卑しく、臂を卷り、緩怠慮外多かりけり。傍輩に向ひても、猶斯の如し。丹羽長秀、竊に羽柴秀吉に叩きけるやう、公若し天下を從へんと思はゞ、勝家を斬るべしと。秀吉笑ひて曰く、我れ何故に、柴田に敵をなさんやと。其夜秀吉、夜もすがら寢ずして大息す。長秀怪みて問ふに、答へて曰く、我れ江州の長濱を、勝家に奪ひ取られし事を、口惜しく思ふなりと。斯くて各、國に歸らんとす。勝家思はく、我を塞ぐ者は秀吉なりと。卽ち軍兵を道に隱し、秀吉を殺さんとす。秀吉聞きて、殊道（わきみち）より、美濃の長松を經て、長濱に至る。勝家は越前に歸らんとして、長濱を通らん事を恐れて、美濃の垂井に逗留す。秀吉聞きて曰く、我れ何故にか、猥に勝家を打つべき。必ず心を置く事なかれとて、次丸秀勝（おつまるひでかつ）とて、信長の末子なりけるを、秀吉之を養ひ置かれしを、人質に出さる。柴田、卽ち秀勝を連れて、木本より越前に歸り給ふ。羽柴・柴田の不和確執の始なり。

十月三日、秀吉を從五位下に敍し、右近衞少將に任ず。秀吉、卽ち紫野の大德寺に

して、信長公の葬禮を行はる。先づ一七日の法事を修せらる。鳥目一萬貫・白米一千石を、大德寺に送らる。杉原七郎左衞門家次・桑原次右衞門・副田甚兵衞、之を奉行す。同月十一日、轉讀の經あり。十二日、頓寫施餓鬼、十三日懺法、十四日入室、十五日闍維。其有樣目を驚かす。奇麗を盡せり。金紗金襴を以て、棺槨を包み、金銀を以て、軒欄を鏤め、沉香を以て、佛像を作りて、棺の內に置き、綾の白幕を四門に張り、近國の武士警固辻堅、弓鑓鐵炮を立並べ、路の兩方に連なる事、既に一萬餘人なり。羽柴小一郎秀長、之を奉行す。前輿は池田古新輝政、後轅は次丸秀勝之を舁く、信長公の八男長丸信吉は、位牌を持つ。秀吉は、不動國行の太刀を持ち、卽ち太刀を大德寺に送る。闍維の後、秀吉・秀勝燒香す。秀吉執奏して、一品相國を贈り給ふ。五山の僧衆、殘らず出仕あり。大德寺に一宇を建て、惣見院殿贈大相國一品泰巖大居士の廟所とす。銀子千枚を、其經營とす。五十石を寺領とす。（次日、鳥目千貫を以て、太刀代として、太刀を返す。）

秀吉、既に津の國の寶寺に、城を作らんとせられしに、遂に成就せずして寢みぬ。

十一月、織田三七信孝は、美濃國岐阜の城にありて、日本を從へて、天下の主（あるじ）とならんと思ふ志あり。信雄卿を反きて、羽柴秀吉を打亡さんと企てらる。秀吉聞付けて軍兵を集め、急に美濃の國に赴き、岐阜の城に取懸けて攻めらる。信孝、元より柴田勝家と心を合せ內通あり。然れども越前は、雪深く降積みて、勝家更に軍兵を催して、出づる事容易すからず。兎角する間に信孝、防ぎ守る事叶はずして、和平を乞はれ、さま〳〵詫事ありしかば、秀吉、さすが信孝を殺す事を、痛はしく思はれければ、和睦して許し歸らる。

將軍記第十四終

將軍記第十五

豐臣秀吉記　上之二

柴田勝家は、越前にありて、秀吉の權威甚だ盛に成行く由を聞きて、大に妬み嫉む事、骨髓に徹りければ、瀧川左近將監一益を呼びて、密に相議りて曰く、羽柴秀吉、既に幼き主君三法師殿を、安土の城に居ゑ置き、我身は管領執權して威を振ひ、後に天下を奪ひ取らんとする。其勢外に顯れ、己に從ふ者をば、近付け取立て、從はざる者をば、疎み退けて押倒さんとす。今若し誅せずば、天下の永き禍となり、悔むとも甲斐あるべからずとて、三七信孝に申して一味せしめ、先づ使を丹羽五郎左衞門長秀が許に遣して、此事をいはしむ。長秀が返事に、秀吉今三法師殿を守立て、後見をせらる。信孝之を嫌ひ思召すならば、三法師殿を岐阜へ迎取り給ひて、信孝御後見ありて然るべし。されども三法師殿御幼稚の間は、樣々の口說は絶ゆべからず。只能く御思案あるべしと申返しぬ。丹羽長秀常に思ふは、天下の事、武勇を以ていはゞ、柴田・瀧川に、誰か肩を並べん。然るを武勇に誇りて、仁義を知らず。主君を蔑にす。是れ羽柴筑前守秀吉は、武にして文あり。能く主君に禮節を行ふ、終には天下を取らん者なりと思へり。此故に、今定かなる返事をば、致さゞりしなり。然るに秀吉の威勢、彌日を重ね月を越ゆるに從ひて、强くなる事、若草の生立つが如し。柴田勝家、此由を傳へ聞くに、胸塞がり腹悶えて、歎息をつき、大雪の降積るを見ても、拳を握り齒を切りて怒を含み、飛立つ計に思ひ乍ら、雪深ければ、軍を催す事もならで、只大雪を惡み暮す。瀧川謀りて曰く、北國の習ひ、十一月より二月迄は、雪深くして、軍用催し難し。此内に勝家と秀吉と和睦をなして、時を待ち給へかしといふ。柴田尤なりというて、怒を押へて使者を遣す。小島若狹守・戸村文荷齋を以て、前田又左衞門利家・不破彦三・金森五郎八が許に遣して曰く、信長公の御事、未だ年を越えざるに、勝家と秀吉と、刀を研ぎ鏃を爭はゞ、人の嘲、世の誹、

遁れ難かるべし。願はくは心を改めて、秀吉と諸共に、三法師殿を取立て申すべし。急ぎ京都に上りて、此由を秀吉に語りて給はらば、悦び入るべしとなり。前田・不破・金森、即ち北の庄を立ちて長濱に至り、勝家が養子伊賀守勝豐に、斯くと語る。勝豐即ち三人と諸共に、長濱を出でて、攝津國寶寺に至り、富田左近將監を以て、秀吉に斯くと申入る。秀吉宣はく、勝家は、信長公の老臣なり。我れいかでか、其言に從はざらんやとて、即ち勝豐・利家・不破・金森四人を召して、樣々もてなさる。四人今は歸らんとして、議して曰く、秀吉の志、案に相違せり。定めて秀吉、此和睦の事、聞入れ給はじとこそ思ひしに、思ひの外に和ぎ給へり。然れども起請文なくして、は益なしとて、又秀吉へ申入れて、迚もの事に、堅き誓約を給はらん。秀吉の曰く、我も斯く思ふなり。丹羽長秀・池田勝入等と談合して、各然るべしといはん時に誓言すべし。此趣を、勝家に語らるべしとなり。四人即ち飛脚を以て、勝家に此趣言遣し、先づ信長の墓所に詣で、日を經て後、四人乍ら北の庄に歸る。勝家、即辛勞を謝して後、大に悦びて曰く、我れ羽柴筑前守を欺き濟したり。明年は時を待ちて、運に任すべしと申されき。秀吉は、蜂須賀彦右衞門正勝・木村隼人に語りて曰く、此度勝家和睦の事、皆是れ我を欺く僞なり。我れ怠りて油斷する所を、俄に來りて京を攻めん爲めなり。我れ能く之を悟り知りぬ。勝家等が智慮を以て、我を僞り欺かん事、蟷螂が斧なるべし。愚なる謀かなとて、大に冷笑ひ給ふ。

秀吉は、洛近き輩、畿内の諸大將の心を取らんが爲め、使者を諸方に遣して、志深く・恩を厚くせられしかば、皆志を秀吉に通じ、如何なる大事ありとも、御用に立つべしと、各思ひ申しけり。又勝家方に親む者をば、色を立てゝ疎み隔て、ひたすら敵なりと思へる氣色なり。

秀吉、軍兵を率して、江州長濱に赴き、在家を燒拂ふ。柴田伊賀守勝豐、長濱の城を守る。秀吉思はく、勝豐は、勝家の養子ながらも、勝家及び佐久間玄蕃允盛政と、勝豐中惡しき事久し。されば長濱の城を攻落さん事は、いと易し。然れども勝豐に降參せさせんには如かじ。即ち勝家・勝豐の間、意趣あるの仔細條々を記して、勝豐が家老木下半右衞門・大金藤八郎・德永石見守を呼びて、具に申聞かせらるゝに、三人な

がら、皆尤なりと同じて、城に歸りて勝豐に語る。勝豐も、日頃勝家に恨深き故に、其恨十七ヶ條を書立てゝ、家人共に讀み聞かせ、此條々、我が非あらば申せといはれしに、家中一同に、是は君の御理なりと申す。さらば面々の心に任せよとあり。家人等、或は其儘勝豐に附從ふあり、或は父母妻子の越前にある者は、越前に下りて止まるも多し。勝豐と勝家、不會せし根元は、初め勝豐を養子に致し、其後勝家、又我が甥佐久間玄馬允盛政に、加賀二郡を與へて、之をもてはやし寵愛する事、勝豐に越えたり。盛政之に誇りて、彌勝豐を輕しめ侮る。故に勝豐、大に嫉み腹立つ。元日祝儀の時、一族皆集まりしに、勝家が盃を、先づ盛政に差す。勝豐大に怒りて、盛政が袖を引止め、勝豐進み出でて、盃を取りて飲む。勝家、盛政、如何ともすべきやうなし。是よりして、勝豐既に勝家を恨み盛政を惡む。勝家彌勝豐を疎みて、其外樣々不義の所爲あるを以て、勝豐、只今秀吉に屬す。

十二月廿三日、秀吉、卽ち安土に至りて、三法師殿に、歳暮の御禮申して、小袖十重・銀子千兩を奉らる。秀吉又小袖五重・銀子百枚・樽十荷づつ、諸大將に送り、其家老方にも、小袖二重づつ與へらる。

瀧川一益を攻む

同十一年正月元日、秀吉、播磨の姫路に赴き、二日に、酒肴・銀子・八木等を諸侍に給はりて、春の始を祝ひ給へば、侍方大に悅び、面々酒宴遊樂を致せり。然れども秀吉は、更に休息もなく、右筆三人を召して、年々の恩祿・太刀・小袖・八木等の費を記させ、算用者十人に勘定せさせ、其後朝飯を食して臥し給ひ、三日の午刻計りに眠覺めて、氣色新に付きて、鬼とも組まんと思へる體なり。斯くて諸士の御禮、神主僧法師等の禮、さても殘らずうけ給ふ。

七日、秀吉上洛參內。次の朝、大津に至り、舟にて其夜安土に赴き、九日に、正月の御禮を、三法師殿及び信雄卿へ申して、五日逗留し、柳瀨渡りを見巡りて歸り給ふ。秀吉思はく、雪未だ消え盡さぬ內に、先づ瀧川一益を打ちて、勝家に氣を失はせんとて、諸軍勢に觸巡らし、我れ北伊勢に軍を思立ちたり。各早く近江の草津に出でて、相待つべしとなり。諸軍我も〳〵と、悉く草津に集りて、秀吉を相待ちけり。

廿三日、羽柴筑前守秀吉、軍兵一萬五千を率して、草津に至り、諸軍勢を集めらるゝ

に、都合七萬餘騎、之を三手に分つ。一手は、羽柴美濃守秀長・筒井順慶・伊藤掃部助・氏家左京亮・稻葉伊豫守を大將として、二萬五千餘騎を、土岐多羅口へ差向け、一手は三好孫七郎秀次・中村孫平次等を大將として、二萬餘騎を、君畑越に遣し、一手は、羽柴筑前守秀吉、自ら三萬餘騎にて、安樂越に懸り、岩石谷峯をもいはず押寄せらる。瀧川一益も、聞ゆる武勇智謀の名大將なれば、軍兵を分つて之を防ぐ。秀吉軍を進めて、桑名邊を燒拂ふ。瀧川怒りて曰く、我れ既に軍兵を分つて、方々を防ぐ故に、手勢僅にして、防ぐ事能はず。桑名を燒拂はれける事の口惜さよとて、齒を切り（くひしば）て、躍り上り〳〵腹立ちけれども、すべき樣なし。小勢を以て大敵を崩すには、夜討に如くはなしとて、日の暮るゝを待つ所に、秀吉、軍兵に仰せけるは、瀧川も、武略の老いたる者なり。夜討すべき事、案の內なり。怠る事なかれとて、大篝・夜廻嚴しくせられければ、瀧川が謀、相違しけり。

羽柴小一郎秀長・三好孫七郎秀次は、軍勢を調へて、瀧川一益が甥に、瀧川義太夫といふ者の籠りし嶺の城に押詰め攻戰ふ。佐治新助が守る所の龜山の城は、秀吉の先陣取卷き、閏正月廿六日の早朝に押詰めて、柵を破り塀を乘り、金掘を以て、坤の矢倉を堀崩し込入らんとす。城中も、命を捨てゝ防ぎ戰ふ。瀧川一益聞きて、方便（たばか）りて退くべしと言遣しければ、佐治は降人になりて城を渡し、長島へ退きたり。義太夫も、防ぐべき力なく、城を開退きけり。秀吉、卽ち關安藝守・木村隼人・一柳市介直末・山岡美作守景隆等に仰せて、伊勢を守らしめ、二月に、秀吉は、長濱に赴かれたり。

柴田修理亮勝家は、佐久間玄蕃允盛政を大將として、二萬餘騎を差添へ、木下邊に押出す。盛政、卽ち諸軍勢と軍評定しけり。前田孫四郎利政、前陣を望みて打出でしに、不破彥三・佐久間久右衞門安次・原彥次郎・金森五郎八、續きて押出す。大將盛政、後陣として進み、軍兵を諸城に置きて、押として守らしむ。斯くて柳瀨に陣を取る。

秀吉此由聞きて、長濱を立ちて、志津嶽の邊に至り、軍を十三段に分けらる。中にも堀久太郎秀政を一番とし、柴田伊賀守勝豐を二番とし、中川瀨兵衞清秀を、三番と

し、秀吉其跡に進みて、佐久間玄蕃允盛政と對陣あり。兩陣の間、僅に十町計りには過ぐべからず。されども只足輕少々出して、鐵炮打合ひつゝ、其日は、兩陣相引にして止みぬ。

次の日未明に、秀吉は、足輕の眞似して、古老の勇士十餘騎を召連れ、嶺に上りて、敵陣の體を見て歸りて曰く、此軍、急に打つべからずとて、群兵をして諸城を守らしめ、要害を堅くして、四月朔日に、秀吉は長濱に歸らる。

柴田伊賀守勝豐は、本山の砦に籠め置かれしが、病氣起りて、日に從ひて重くなりければ、養生の爲め京に上る。勝豐、卽ち我家臣山路將監といふ者を、城中に殘し置きたりける所に、山路旣に心替して、城中一方の軍將に、木村小隼人といふ者を殺して、柴田勝家が軍兵を、城に引入れんとす。勝豐が舊臣に野村勝二郎返忠して、此事顯れければ、山路將監は落失せたり。木村小隼人、大に驚き怒つて、山路が母並に妻子以上七人を捕へ、秀吉の命に依つて、磔にかけたり。

織田三七信孝は、舊冬秀吉と和睦ありしを、又其約を違へ、柴田勝家・瀧川一益に內通して、軍兵を催し燒拂はる。秀吉聞きて、長濱を打立ちつゝ、濃州大柿に赴きて、急に三七殿を攻めらる。

山路將監は、佐久間盛政が陣中にありしが、盛政に告げて曰く、秀吉旣に美濃に赴く。是れ三七殿御心替りありて、柴田勝家殿に一味し給ふ故なれば、此度後詰して、秀吉を打退け、三七殿を救ひ給へかしといふ。盛政が曰く、我も斯く存ずと雖も、大山を隔てゝ難所なれば、是より容易く軍勢を出し難し、力なき事なりと。山路重ねて私語きけるやう、敵の要害丈夫にして、何れの城も詰寄せ難し。但余語の湖の傍は、中川瀨兵衞清秀が陣として、要害も疎に、味方の諸城を遠く離れたり。謀は不意を打つに如かず、急ぎ中川が陣を打ち給へかしといふ。盛政實にもと思ひ、勝家に告げたり。勝家も、然るべしと思ひて曰く、さあらば我軍兵をも差添ふべし。

前田利家・利長・原彥二郎・安井左近等を以て、敵陣に對して守らしめ、盛政は、急に中川が陣に詰懸け、軍終らば、早速に引歸るべし。構へて滯りて、遲々すべからずといへり。盛政うけがひ、一萬餘人を率して、余語の入湖の邊に至る。不破彥三・德山

中川清秀討たる

五兵衞・佐久間久右衞門安次、先陣なり。中川瀨兵衞が兵、己が馬に水を飲ふとて、湖の邊に出でたるを、盛政が軍兵駈寄せて討たんとす。彼者逃歸りて、中川に斯くと告げたり。清秀と高山右近、其勢六千餘騎と、不破彦三・佐久間久右衞門と、大に戰ふ。盛政は、軍兵一千餘人を分けて、城の後に廻し、城下の家に火をかけ燒立てしに、中川・高山が軍兵、度に迷ひて亂れしかば、高山右近は逃落ちて、美濃守秀長の木本の陣に駈入りたり。中川瀨兵衞、一命を捨てゝ防ぎ戰ふ。斯くて城中僅に六百餘人、漸く引色になりしかば、北國勢、勝に乘りて攻上る。瀨兵衞、小姓馬廻五六十人にて、突いて出でつゝ、追出し攻入りけり。寄手の大勢、新手を入替へ〳〵攻めしかば、城中の兵、或は討たれ、或は痛手負うて、殘り少なになりしかば、詰の城に引上る所に、寄手聲々に呼ばはりけるは、如何に中川殿、きたなくも敵に後を見せ給ふ者かな。引返して勝負あれかしといふ。瀨兵衞、いとゞ無念にや思ひけん、必得たりとて鑓取直し、近付く敵五六人突伏せたり。佐久間玄蕃允が郎等に、近藤無一といふ者に組まれて、中川瀨兵衞討たれければ、城は終に落ちたり。盛政大に勇み誇りて、清秀が首を、柴田が許に送り遣す。勝家甚だ喜び、急ぎ其陣を引取りて歸れと、使を立つる事五六度に及ぶと雖も、盛政更に歸らず。猶此所に陣取りて控へたり。

盛政等大勢にて、中川瀨兵衞を攻むる事急なる由、秀吉聞き給ひ、大柿には、軍兵を殘し置きて、自ら美濃より、直に志津嵩・柳瀨の邊に赴き給ひしかば、日既に暮方になりぬ。軍兵一萬五千餘騎、藤川に着く所に、村里の百姓等、松明手毎に取持ちて奉る。長瀨の者共は、酒肴・餅・赤飯・馬秣・糠・藁、山の如く持出でて、秀吉に參らせたり。秀吉大に悅び、滯る事なく志津嵩に着きて、城毎に人を遣し、柳瀨表に出づべき由を相觸れらる。丹羽五郎左衞門尉長秀は、江州坂本の城を出でて、志津嵩の城に入りたり。

佐久間盛政等は、遙に押來る敵陣の松明夥しきを見て、すはや羽柴筑前守秀吉、大軍にて寄せ來るといふ程こそあれ、陣中亂れ騷ぎて、急ぎ引拂はんと犇きたり。原彦次郎・安井左近を殿として、引きける所に、秀吉の先陣押詰めて戰ふ。盛政は、一

萬五千餘騎を率して、志津嵩の北なる嶺に取上りて、使を柴田三左衞門勝政が許に遣す。勝政、三千餘騎にて馳せ來り、盛政と一つにならんとするに、秀吉の大軍進み來りて、鐵炮を打懸け矢を放つ事雨の如し。勝政防ぎ兼ねて、軍兵亂れ傾く。秀吉、卽ち軍兵を勇めて打たしめらる。福島市松正則、一陣に進み、首を取りて秀吉に奉る。加藤虎助淸正同じく孫六嘉明・平野權平長泰・脇坂甚內安治・糟屋助右衞門・石川兵助・片桐助作直盛以上七人、鋒を揃へて進み戰ふ。世の人、之を柳瀨の七本鎚と名づく。佐久間玄蕃允盛政は、拜鄕五左衞門を招きて曰く、先陣既に傾き立ちて亂れたり。汝いかにも計らへといふ。拜鄕畏りて引返す。淺井吉兵衞・山路將監・宿屋七左衞門、同じく返し合せけるが、拜鄕眞先に進み、石川兵助と渡し合せ、諸共に討死す。秀吉の軍兵、勝に乘りて、敵を追懸くる。盛政は、軍勢を麾く。原次郎が曰く、敵勢は彌重なりて、谷より上り、峯に集る事雲霞の如く、味方は、凩の誘ふ枯葉にて、後崩すべしと見ゆ。只願はくは一合戰あれかし。秀吉、假令何十萬騎なりとも、某先陣すべしといひけれども、盛政更に用ひず。案の如く秀吉の軍勢は、見

佐久間盛政敗軍

るが內に夥しく集り重なりしを、盛政が軍兵共、驚き恐れ、後崩して亂れ騷ぐ。丹羽五郎左衞門長秀、此由を見て、時分は今ぞ、懸れ〳〵と呼ばはり、鬨を作りて押懸る。北國勢の後陣既に亂れて、散々になりしかば、玄蕃允盛政も、惣敗軍になりて、柴田三左衞門勝政討死す。

柴田修理亮勝家は、盛政が敗北せし事を聞きて、大に怒りて曰く、余語の陣を急ぎ引取れと、使を立てしは爰の事なり。軍法に闇き故に、斯く敗軍はせしなり。さらば我れ一軍せんとて、軍兵を點檢するに、皆落失せて、僅に三千餘騎には過ぎず。されども勝家は、勇氣更に撓まず。よし〳〵弱き奴原、臆病神の付きたらんは、足纏になるものぞ。軍の習ひ、勢の多少に寄らず、只軍兵の志を一になすを以て、敵をば打靡くるものぞかし。進めや者共と勇むれども、殘り止まる軍勢共、いとゞ不興の色あり。爰に毛受勝介諫めて曰く、味方の天運既に傾きたり。縱ひ戰ふとも、功をなす事あるべからず。雜兵の手に懸りて討たれ給はんは、口惜しかるべし。只願はくは北の庄に引籠り、御自害あるべし。某御諱を犯し奉り、敵を防ぎて討死せ

んといひければ、勝家實にもと思ひ、大に其忠義を感じ、我に忠あらん輩は、勝介に與せよとて、北の庄に歸られたり。既に秀吉の軍勢、頻に追ひ來りて攻め懸る。毛受勝介は、待設けたる事なれば、少しも騷がず、相從ふ軍兵三百餘騎を、左右に立てて名乘りけるは、此年頃、天下に隱れもなき、鬼柴田といはれし修理亮勝家爰にあり。首取つて高名せよやとて突いて出づる。勝介が兄に毛受茂左衞門尉、同じく一所に相戰ふ。敵軍開き靡きしかども、新手入替り攻合ひければ、三百餘人の者共、或は討たれ或は手負ひて、殘り少なになりければ、今は是迄なりとて、毛受兄弟、腹搔切つて臥したり。

柴田勝家は、越前の府中に來り、前田父子に對面し、年來軍功の苦勞を一禮して、湯漬を食し、酒飲みて快く笑ひて立出でつゝ、北の庄に歸り、柴田彌右衞門尉・小島若狹守・中村文荷齋德庵・同與左衞門尉・松平甚五兵衞尉等を召集め、城中の手配をせさせらる。

秀吉、既に透間なく、堀久太郎秀政を先陣として追行く程に、其日の暮方に府中に

柴田勝家自盡

着き、脇本邊迄、錐を立つる空地もなく、軍兵犇と陣取りたり。軍法の掟を陣中に觸廻し、明方の暗紛れに、城を取卷きけるを、城中より鐵炮を以て打出すに、寄手多く討たれけり。

柴田權六・佐久間玄蕃允盛政は、志津嵩敗軍の後、賀州に落隱れたりしを生捕りぬ。秀吉、卽ち山口甚兵衞・副田甚左衞門に預け置かる。城中此由聞きて、彌勢力を失ふ。夜に入りて勝家は、城中の一族他家の軍士を集め、酒宴を始め、數盃を傾けて曰く、我れ既に藤吉猿面郎に亡さるゝ事、其恨淺からず。明日は早や浮世の隙を曙の雲となり、黃泉の鬼客とならん。今夜酒飲みて、人間世の思出にせんとて、數刻を移しける所に、夜既に明けしかば、四月廿四日、殿主に火を懸け、妻の小谷殿（信長公の妹なり）以下男女三十餘人、一時の煙と上りつゝ、城は焦土の野原となりたり。

廿六日、秀吉、夫より賀州尾山に至り、前田利家に、石川・河北二郡を給はり、金澤の城を守らしめらる。利家は、柴田勝家に與せし人なれども、其上秀吉と、別魂の志を通ぜられし故なり。越前・加賀の內能美・惠那の二郡を、丹羽長秀加增あり、越前

守になさる。此度軍功の勸賞なり。

織田信孝自盡

秀吉、美濃に赴き、織田三七信孝の岐阜の城を取圍まる。信孝は、勝家を後詰の便に賴みてこそ、謀叛の色は立てられけれ。柴田既に亡びしかば、城中の軍兵落失せ、力弱く成行きたり。信雄卿は、尾州の軍勢を率して、同じく岐阜の城に押寄せ、使を遣して曰く、早く城を出でて、尾張に來るべしと。信孝、即ち城を出でて舟に取乘り、知多の宇津美に至らる。信雄卿の郎等に、中川勘右衞門といふ者を遣して、信孝に自害を勸めければ、力なく腹切つて死せらる。

五月三日、秀吉、既に江州坂本に歸陣あり。諸將軍士、皆端午の祝儀申す。淺野彌兵衞長政に仰せて、佐久間玄蕃允盛政・柴田權六を京都に引渡し、六條河原にして首を刎ねらる。佐久間盛政大音聲を上げ、諸人に向つていふやう、我れ此程、余語の湖の要害にして、中川瀨兵衞を打取りける所に、勝家の下知に任せ、軍勢を引取らば、いかでか斯る事に及ばんや。軍功に誇らずして、戰克ちなば、秀吉を殺さん事、今斯くの如くすべきものをといふ。聞く人、大に其勇氣の怯れざる事を感ず。斯く

佐久間盛政誅せらる

て盛政・權六誅せらる。瀧川左近將監一益は、さしも武勇の名高く、世の人恐れ重んじけるが、信孝・勝家に心を通じて一味せし所に、信孝・勝家皆亡びしかば、力を失ひ勢衰へて、降人に出でられたり。秀吉、年來の好を思ひ宥め許して、越前の國大野といふ所に移して住ましめらる。威力盡き果て、幽なる有樣、其上にも似ず。老驥繫がれて、槽櫪の前にあるが如し。

七月朔日、秀吉既に加藤虎助清正（後に主計頭と號す。又は肥後守になされし）・加藤孫六郎嘉明（後に左馬助と號す）・福島市松正則（後に左衞門大夫と號す）・脇坂甚内安治（後に中務大夫と號す）・平野權平長泰（後に遠江守と號す）・片桐助作直成（後に東市正と號す）・糟屋助右衞門（後に内膳正と號す）右の六人に、軍功の賞を行はる。其上僅に二百石の祿をうけしに、今各五千石を給はる。俄に富貴に至る事、諸軍士皆羨みつゝ、彌軍忠を勵まさん事を思へり。柳瀨表の七本鑓にて、石川兵助、一陣に進みて討死す。若し命あらば、其第一に賞せらるべし、惜いかな。

秀吉、既に城を攝州大坂に築き給ふ。此年參議に任じ、從四位下に敍す。

同十二年の春、信雄卿、既に秀吉の威勢に誇る事を妬みて、亡さんとする志あり。

信雄秀吉相戰ふ

然るに信雄卿の家臣に、松島の城主津川玄蕃允・星崎の城主岡田長門守・刈安賀の城主淺井田宮丸、皆武勇の譽、世に高し。秀吉深く志を厚くして睦びちなみ申されしを、信雄卿に讒言する者あり。此三人、秀吉と心を合せて、君を傾けんとする企ありといふ。信雄卿、疑を起して、長島の城に召寄せて、三人ながら殺されたり。星崎の城に此由聞きて、長門守が弟勝五郎大に怒り、軍兵を集めて楯籠る。信雄卿、つら〳〵心に思はく、秀吉定めて此事を怒り、我に向つて旗を靡かし弓を引かんかと。此故に、使者を東照大權現の許に遣して、平に賴む由仰せらる。權現大にうけごひ給ふ。又使を、池田勝入・森武藏守長一に遣して、一味せらるべきの由賴まれたり。是より先に秀吉より、尾藤甚右衞門を遣して、懇に禮儀を盡されけり。池田勝入、何れの方に、與力同心すべしとも思ひ定めず。片桐半右衞門に語りて曰く、我れ年久しく、信長公の恩を蒙りぬ。今は信雄卿に與して、恩を報ぜんと思ふは如何にと。片桐が曰く、誠に義の道を立つべくば、仰にや及ぶべきと。其時伊木清兵衞、進み出でて曰く、某、彼の秀吉の有樣を聞及ぶに、是れ天下の大器量ある人なりと覺えたり。只同じくは、秀吉に從はんに過ぐべからず。是れ身を全うし國豐にして、子孫の爲め家榮えん。若し信雄卿に從はゞ、身危くして國失はれ、子孫亡ぶるに年を越ゆべからず。假令恩を思ひ義を守るといふとも、家亡ぶるに至りては、子孫絶えて、名を埋もらさん。君能く思案あるべしと申す。勝入、猶も志を思ひ定めず。然る所に秀吉の方より、津田隼人を使として曰く、美濃・尾張・三川三ヶ國を領知あるべし。此事已後迄も違ふべからずと、誓言を以て申越さる。勝入彌心惑ふ。伊木清兵衞、强く諫めて勸めける程に、勝入終に秀吉に付かれたり。片桐半右衞門、之を嘲り笑ひて曰く、義に背き恩を忘るゝ人なり。我更に勝入に從はじといふ。森武藏守長一も、秀吉に一味しけり。

家康、信雄を援く

東照大權現、軍兵を率して、尾州の清洲に至り、信雄卿に對面して、秀吉縱ひ攻め來るとも、防ぎ退けん事、掌の內にあり。君御心を痛ましめ給ふ事あるべからずとなり。尾州犬山の城は、信雄卿の家臣中川勘右衞門之を守る。中川、既に信雄卿の勢州長島の城に赴き、軍の相圖手賦を定めて、歸る道にして、池尻平左衞門出合ひて、

兩人共に討死す。

犬山の城に、大將なくなりける事を、池田勝入聞きて、犬山の里人を招きて、城の要害能く聞濟して、紀伊守之助と、軍兵を一に合せて、犬山の城に押寄せ、急に攻落さんとす。中川が叔父清藏主、大に戰ひて討死す。勝入終に犬山を乘取り、猶進みて、小牧山の近邊に至り、在家を燒拂ひて、早々引取りぬ。

大權現は、信雄卿と清洲の城におはして、小牧邊に火ありと聞き給ひ、是れ必ず池田勝入が働きけるならんとて、軍兵を率して打向ひ給へば、勝入は、既に兵を入れて、引取りける跡なりければ、空しく立歸る。夫より又軍兵を調へて、犬山の邊に赴き、森武藏守長一が羽黑に陣取りて居たるを見て、酒井左衞門尉忠次・奥平美作守勝昌・松平紀伊守家信等五千餘騎を差向けて、森長一と戰はしめらる。長一、打負けて敗軍す。池田勝入父子・稻葉伊豫守・子息右京亮等軍兵を率して、犬山に軍立し、長一が敗北せしと聞きて、進みて戰はんとす。或古老の兵、勝入が馬を控へて曰く、敵軍既に勝に乘りて勇む。我等進みて之を討つに利あるべからず。只待受けて戰はゞ利あるべしと。稻葉伊豫守が曰く、我れ先陣して敵を討つべし。敵は疲れて、味方は新手なり。勝つべき事眼前にありとて、鑓打振り曰く、老の波を、血の川に湛へんものをと勇みければ、諸軍聞きて大に笑ふ。

勝入が軍兵押來るを、大權現見給ひて、新手の大勢に駈合はん事、味方の勞軍勝に誇らば、是れ必ず敗を取るの端なりとて、兵を引きて歸り給ふ。勝入等、大權現の弓矢の締りたる事を感じて、同じく又引返す。榊原小平太康政進み出でて、小牧山を陣所とせんと申す。大權現許し給ふ。信雄卿、同じく小牧山におはします。兼て蟹清水・外山村・宇田津村等の砦を修理し、小幡の古き要害を築きて、兵を置きて守らしむ。

秀吉此由聞きて、尾藤甚右衞門が許に、飛脚を立てゝ言遣されけるは、敵兵縱ひ合戰すべしと犇くとも、必ず夫に立合うて、兵を出すべからず。池田勝入・森長一は、武勇の名に矜りて、敵を侮る癖あり。汝堅く之を止めよと言遣されたり。

秀吉既に大坂を立ちて、犬山に赴かる。軍兵十二萬五千餘騎なり。斯くて犬山に至

りて、夫より樂田（がくでん）・羽黑の邊に押付け、小牧山の敵陣に對して、多く子城を構へ、二重堀の城には、日根野備中守弘就・舍弟次右衞門、二千餘騎にて守らしめ、岩崎山の城には、稻葉伊豫守・子息右京亮貞通等四千餘騎、小松寺の城には、丹羽五郎左衞門長秀八千餘騎、青塚の城には、森武藏守長一三千餘騎、內窪山の城には、蜂屋出羽守頼隆・金森五郎八三千餘騎、其外村々嶺々、皆陣所として、軍兵さながら雲霞の如し。四日に、池田勝入、其家老軍士を集めて議して曰く、敵兵大半は小牧山にあり。我れつら〳〵思ふに、三河國は、軍兵殘りなく出でたる跡なれば、國中には、手向ふ者あるべからず。此時を窺ひ、三河に亂れ入りて、國中の村里在々所々を燒拂はゞ、小牧山の敵軍共驚き騷ぎ、故鄕の妻子の事を歎かん。然らば敗北すべき事、掌を指すが如くなるべしと。家老の臣等尤なりと一同す。勝入頓て犬山に行きて、秀吉に語りければ、秀吉も甘心あり。さらば明日東三河に赴き、在々を燒拂ひ、篠木・栢井に城を構へ、兵を入れて守らしめ、敵國に夜打を致しなば、敵必ず惑ひ恐れて退屈すべし。敵を侮る事なかれ、備を亂して進むことなかれとて、勝入を返されたり。

秀吉又、增田仁右衞門長盛を以て仰さるゝは、池田勝入、軍兵を三州に進む。三好孫七郎秀次一萬餘騎、堀久太郎秀政五千餘騎、其外、兵を加勢して勝入を救ひ、勝入が下知に從ふべしとて、勝入父子にも此趣を言遣され、秀吉又犬山を出でて、樂田に陣を居ゑらる。斯くて池田勝入・子息紀伊守之助・森武藏守長一・三好孫七郎秀次・堀久太郎秀政、各軍兵を率して、篠木・栢井に至り、參州の地に押入らんとす。篠木の代官より、小牧山に告げ來る。

東照大權現、此由聞き給ひ、酒井左衞門尉忠次・石川伯耆・本多平八郎忠勝等をば、小牧に止めて陣を守らしめ、大須賀五郎左衞門康高・榊原小平太康政・本田彥次郎康重・水野惣兵衞・丹輪勘助氏次を以て先陣として、小牧山を打立ちて、長久手の邊に至らしめらる。軍兵都合四千餘人なり。次に又、本田豐後守廣孝を以て、龍泉寺の邊に赴きて、敵陣の有樣を見せしめらる。斯る所に池田勝入等、卽ち丹輪勘助が岩崎の居城を取卷きて攻むるに、甚だ急なり。勘助が弟次郎助、防ぎ戰うて討死せしかば、城落ちたり。勝入大に喜ぶ。此時に當つて、東照大權現は、小幡に至り給ふ。大須

賀康高・榊原康政・本田康重・水野惣兵衞・丹輪勘助と、三好秀次と相戰うて、大に打破る。秀次叶はずして落行く。康高・康政等、勝に乘つて追懸けつゝ、長久手邊に至る。秀次が郎等に、田中久兵衞といふ者、堀久太郎秀政が陣に馳せ來りて曰く、三好秀次、只今敵軍と戰うて、大に打負けられたりと。其詞未だ終らざるに、秀政眼を瞋らかし、大に叱りて曰く、汝は何とて、愚なる事を申來れるや。我れ推量するに、汝更に軍の事を、我に知らせん爲に、來りたるにてはあるべからず。軍の恐しさに逃げ落ちて來れるならんと、恥しめられて、田中久兵衞赤面して物いはず。少頃ありて、敵兵押來りて、田中を討たんとす。田中が曰く、我れ先づ三好秀次に問ひて後に、軍をばすべきぞやとて、鞭鐙を合せて、跡をも見返らず逃去りぬ。諸軍大に笑ふ。堀久太郎秀政、此由を見て、軍を調へ備を立てゝ相待つ所に、大須賀康高・榊原康政等、秀次を追ふ事一里計にして、堀久太郎秀政、横合より突いて懸るに逢うて、大須賀・榊原等、靡き亂れんとす。本田彦次郎康重、爰を破られては大事なりとて、命を捨てゝ戰うて、痛手薄手七ヶ所を蒙りぬ。敵もさすがに戰ひ疲れて、兩方に引分れたり。

池田勝入・其子紀伊守・森武藏守、軍を進めて押來る。東照大權現、其寵臣井伊萬千代直政（後に兵部と號す）等四千餘騎を率して、長久手の巽の方の山に繰出し、三手に分れて備を立て、弓鐵炮を亂れ放つ事雨の如し。池田・森が軍兵打立てられ、馬の足を居ゑ兼ねたり。森武藏守長一、眞先に進みて、駈亂さんとする所に、鐵炮に眉間を打碎かれ、馬より逆に落ちて死しければ、諸軍大に亂れ、勝入が軍兵も散々（さりゝゝ）になりて、備を崩しけり。勝入が郎從秋田加兵衞・梶浦兵七郎・片桐與三郎・竹林小平太、既に勝入が討たれんとするを見て、返し合せて、萬千代直政が軍兵と、防ぎ戰うて討死す。永井傳八（後に右近と號す）直勝、生年廿二、自ら鑓を取りて勝入と戰ひ、終に勝入を突伏せ、首取つて差上げたり。安藤彦兵衞直次（後に帶刀と號す）、池田紀伊守之助と渡り合ひて、之助終に討たれたり。池田丹後守は、之をも知らで戰ひしが、勝入・之助等、皆討たれたりと聞きて、頓て落ちて歸る。是に於て大權現と、信雄卿の軍兵を一手になして、逃ぐるを追ふ事甚だ急なり。追打に敵の首數多取りて、勝鬨をあげて引返し給ふ。是れ

本田佐渡守正信・内藤四郎左衞門正成が、諫めける故なり。秀吉、大軍の新手にて備へたり。勝に乘りて長追をせば、味方疲れたる軍兵なり。必ず大なる後れを取るべし。只是より返し給へと申しければ、實にもとて、則ち小幡の郷に引返し給ひけり。

秀吉、既に勝入父子・長一以下討たれたりと聞きて、樂田を打立ちつゝ、備を立てゝ、龍泉寺に着き給ふ。木村小隼人・一柳市介直末等、馳せ付きて從ふ。直に長久手に進みて、戰はんとせらる。敗軍の者共來りて、大權現・信雄卿、皆引返し給ふといふ。秀吉の曰く、我れ勝入を戒めて、汝必ず敵を侮る事なかれ、勝に乘りて誇る事なかれといひし言葉を用ひずして、今斯くの如し。口惜き事かな。是より小幡に赴き、大權現と一戰を遂げ、勝入・長一が弔軍にせんとて、馬を進めらる。稻葉伊豫守等、馬の口に取付きて諫めけるは、日既に暮方になり、敵又引籠れり。味方の利を失はん事疑なし。軍は今日に限るべからず。先づ引入り給へと、諸軍一同に申しければ、秀吉、怒を押へて歸り給ふ。此時本多平八郎忠勝、僅に二三百人計を率して、秀吉の大軍と四五町を隔てゝ打並びて、小幡に行く。秀吉の先陣、之を討たんといふ。秀吉許し給はず。忠勝更に恐れたる色なし。勇氣彌武くして、終に小幡に至る。世の人、ほめぬ者なし。和睦ありて後に、秀吉大に平八郎をほめて曰く、忠吉が武勇、其分量を知り難し。然れども長久手の歸るさに、小勢を以て、我が大軍に打並びて行ける事は、武勇の氣、甚だ常の人に過ぎたりと、大にほめ給ふ。聞く人皆羨み思ひけり。

石川伯耆守は、大權現股肱の臣なり。然るを志を秀吉に内通せしかば、酒井左衞門尉忠次、之を見咎めて、其裏切せんかと危みて、秀吉の軍を討たずして引退き給へり。

秀吉、既に犬山の坤の方に當りて、奈良・高田といふ所に城を構へて、長谷川藤五郎秀一・稻葉右京亮貞通を以て守らしむ。

秀吉、羽黑の舊壘を築きて、山内猪右衞門・伊藤掃部助・堀尾吉晴を居ゑて守らしめ、小牧山に對して、子城十餘ヶ所を構へて、美濃國戸島に至りて、羽柴小吉を居ゑて城主とす。

秀吉、軍兵六萬餘騎を率して、青塚の邊に至り、二重堀の砦を取拂ふ。木村常陸介・

神子田半左衞門・小寺官兵衞・明石左近、猶之を守る。敵兵襲ひ來りて、打退けんとす。細川越中守忠興が兵、之を破る。其夜秀吉、卽ち神子田半左衞門を召して曰く、今日の軍に、汝いかなれば、戰に力を盡さゞると。神子田が曰く、手の軍兵少き故に、心の儘に働き得ずといふ。秀吉怒りて曰く、汝初め我に屬する時は、郎從僅に十人にだも足らず。今の手の者は、其上より多き事、何增倍ぞや。夫に人數少しと て働かざるは、心あるかとて、秀吉、夫より神子田を疏み惡みて、後に終に打殺されき。

五月、秀吉、旣に堀久太郎に、樂田を守らしめ、加藤遠江守に、犬山の城を守らせ、秀吉自ら美濃に赴き、富田の寺內に陣を居ゑて、加賀野井彌八郎が守る所の城を攻めらる。信雄卿、此由聞きて、千草三郎左衞門・濱田與右衞門・小泉甚六・楠十郎・林與五郎・其子十藏・小坂孫九郎、其兵二千騎を遣して、加勢せらる。秀吉急に攻めつけらるゝに、城中悚へずして降參す。秀吉更に許さず、いよ〳〵急に攻められしかば、城中大に困(くるし)む。一日大雨降り暮しけるに、夜に入りて城の兵共、門を開きて打つて出でんとす。秀吉の兵相向ひ、一人も洩らさじと攻め戰ふに、突崩し〳〵逃げ落つる。跡に後るゝ者は、皆打殺され生捕らる。千草三郎左衞門・林十藏・加藤太郎右衞門は討死す。楠十藏は生捕らる。淺野彌兵衞長政、之を申宥めて、命を助けんとす。秀吉うけがはず、終に首を刎ねらる。

秀吉軍兵を進めて、竹鼻の城を攻めらる。城主不破源六、之を防ぐ。秀吉は、城の體を察して、四方に長堤を築き、木曾川を堰入れらる。水旣に城を浸し、蛇・蛙・鼠數百千集まる。源六降參す。秀吉許して城を取り、一柳市介直末を、城主として居ゑられ、夫より多藝(たき)に赴き、直江村に砦を構へ、丸毛三郎兵衞を居ゑて、後に大垣に歸らる。

瀧川左近將監一益は、柴田修理亮勝家亡びて後は、越前に隱れ居たるを、秀吉、其武勇の名高き事を惜みて、伊勢の神戶に居らしめらる。瀧川一益、此程秀吉と信雄卿と、軍に取結ぶと聞きて、尾州蟹江の城主前田與十郎に、使を遣して曰く、必ず忠節を、秀吉に盡さるべし。然らば家門の爲め宜しかるべしと。前田之に從ふ。瀧川一

益は、九鬼右馬允嘉隆と共に舟に乘りて、蟹江城に入りたり。大權現・信雄卿、此由聞きて、軍兵を率して蟹江の城に取懸け、急に之を攻めらる。酒井忠次・榊原康政、大に軍功を勵ます。瀧川一益防ぎ兼ね、力盡き果てゝ、前田與十郎が首を切つて降人に出でたり。一益、夫より伊勢に歸りけれども、比興の爲なりと、諸人笑ひ嘲りしかば、恥かしく思ひて京に上る。爰にも足をためず、丹波に逃下りぬ。秀吉は、蟹江の軍を聞きて、瀧川を救はんとて、大垣を立ち給ふ。一益城を落ちたりと聞きて、秀吉直に京都に歸り上る。大權現も遠江に歸り、小牧の城には、榊原康政を殘して守らしめらる。

秀吉、又伊勢に赴き、羽津に陣取り、信雄卿も、長島・桑名に陣取り給ふ。

秀吉、既に富田左近・津田隼人に語りて曰く、我は信長公の大御恩を、雨山に蒙りし事、言葉に盡し難し。斯くて明智日向守光秀を誅罰す。信長公定めて、眉を黃泉の底に開け給はんものをや。夫に信孝・信雄、皆我を怨みて、殺さんとし給ふ。是何事ぞや。されども我れ已む事を得ずして、軍を出して之を防ぐ。是只身の難を遁れんが爲なり。更に我が本意にはあらず。信孝は運盡きて、既に死し給ふ。我れ今願はくは信雄卿と和睦せん事を思ふ。此事叶はゞ、我身の喜、何事か之にまさらん。汝達能きやうに相計らはれよとなり。富田・津田、深く感じて涙を流し、即ち桑名の陣に行きて、信雄卿に申入れしかば、此上は和睦あるべきと仰あり。兩人喜びて立歸りければ、秀吉も甚だ喜び給ふ。

秀吉信雄和睦

十月廿日、矢田川原にして、秀吉と信雄卿と、和睦の對面あり。秀吉大に愼み、手を束ねて膝を屈め、涙を流して、暫く物申されず。斯くて御太刀を獻じて、秀吉立歸らる。是より兩陣の諸軍、萬歲を謠ひ、大に喜び合へり。秀吉、即ち犬山の城を、信雄卿に返し給ふ。

十一月廿二日、秀吉を權大納言に任じ、從三位に敍す。此年、秀吉・信雄卿、同じく大權現に申入れらるゝ趣あり。是に依つて大權現、其子息秀康後に三川守と號すを上洛せしめ給ふ。時に年十一歲なり。石川伯耆守が次男勝千代・本多作左衞門重次が子仙千代後に飛驒守と號すを相添へらる。秀吉宣はく、秀康は、是れ我が養子にすべきなりとて、羽柴氏

を參らせらる。實には大權現の武勇なるを以て、腹黑なる事もやあるべきと疑ひて、人質とするが爲めなり。其後石川伯耆守は、京に上りて、秀吉卿に仕へ奉る。時の人、皆其後暗き事を誹り、口には定かにいはざれども、各石川を、嘲り思ひけるとかや。

同十三年三月、秀吉、內大臣に任じ、正二位に敍す。是より先には、秀吉自ら平氏を稱せられけるを、內大臣に任ぜられてより、藤原氏に改め稱せらる。

紀州根來寺の法師等、武命に從はず。秀吉卿軍兵を率して、彼等退治の爲め馳せ向ひ給ふ。大和大納言秀長（秀吉の舍弟）・羽柴中納言秀次（實は三位法印一路齋が子なり。初め三好山城守が養子として、三好孫七郎と號す。後に秀吉養子となし給ふ）を、副將軍として赴かる。根來の僧此由聞きて、岸和田邊に、千石堀と積善寺と濱城と、三ヶ所の要害を構へて、之を防ぐ。秀吉、卽ち秀次を千石堀に向へ、長岡兵部大輔藤孝・其子與一郎忠興・蒲生忠三郎氏鄕を、積善寺に向へ、中川藤兵衞・高山右近を、濱の城に向はしむ。堀左衞門尉秀政・筒井順慶・長谷川藤五郎秀一は、別に一萬五千の軍兵を率して、直に根來寺に向ふ所に、千石堀より兵五百人、橫合に、堀

根來寺を攻む

秀政等が軍中に打つて懸る。羽柴中納言秀次、此由を見て、兵を進めて、秀政等と一つになりて、根來の五百人を、前後より挾みて打つ。根來方、立足もなく追崩され、千石堀に逃籠る所を、附入にせんとするに、城中固く防ぐ。堀は深し要害はよし、容易く攻め落すべきやうなし。筒井順慶が手より、火箭を射込む事雨の如し。其火、旣に城中鐵炮の藥筥に入りければ、城中俄に火燃え出でて燒崩れ、燒死する者、一千六百餘人なり。積善寺も濱の城も、皆逃落ちたり。秀吉猶兵を進めて、根來寺を攻めらるゝに、寺中多くは、皆老僧・兒・喝食なり。能き武者共は、千石堀・積善寺・濱城に遣し置きければ、皆落失せたり。今は防ぐべきやうなく、周章てふためき、佛像・經卷・什物をも取除くる隙なく、散々（ちりぢり）になりぬ。寄手の先陣、門前にして鬨を作れども、出合ふ者なし。軍兵寺院に亂れ入りて、金銀什物を濫妨して、俄に得付きたる者多かりし。

秀吉、夫より進みて、雜賀に至る。大田村の城に、敵兵三千餘人籠りて道を妨ぐ。秀吉宣はく、急にすべからずとて、三月廿四日、城の四方に長堤を築き、吉野川を堰

入れしかば、城中之に力を失ひ、降人にならんといふ。城主並に武勇の名ある者百五十三人自害して、秀吉卿に、城を退き渡す。秀吉、卽ち中村孫平次を居ゑて守らしめ、夫より熊野山中の一揆を討たんとて、進み給ふ所に、新宮・本宮の社人、其外村々里々の人民百姓等、各手を束ね膝を折りて降參しけり。秀吉公宣はく、熊野には、關役の事茂くして、旅人商人難儀すといへり。今より以後、關役を停止すべしと、熊野の別當に仰付けられけり。秀吉夫よりも、和歌の浦玉津島に至りて、遊覽ありて後、大坂に歸り給ふ。

丹羽長秀死去

四月十日、秀吉公、高野山の法師等を戒め鎭め給ふ。寺領の外に、押領の地あるを返し、學文を嗜みて武勇を棄て、沙門の道を行ひ、謀叛朝敵國法に背く輩、山中に隱るゝを、抱へ置くまじき由、三ヶ條の制法を定めらる。同十六日、學侶方檢校法印良運・行人方法眼空雄、既に一山の衆議を以て、紳井新介に付きて請文を奉る。

丹羽五郎左衞門尉長秀卒す。年五十一。然るに長秀、平生積聚の病ありて、甚だ苦しむ。此度起り出でたるは、殊更に痛み堪へ難く、苦しかりけり。醫療其術も叶はず、百藥其功も驗なし。是に於て自ら刀を引きて、腹を刺して死す。火葬の後、灰の中に、積聚を取出すに、未だ焦(もえつ)盡きず。其大さ拳の如く、形石龜に似て、其啄は、尖り曲りて鳥の如し。刺貫きたる刀の痕、背にあり。秀吉見給ひて、誠に奇物なり。醫師の家には、斯る物迄も貯へてあるべき事なりとて、竹田法印に給はりぬ。

秀吉、四國を退治せんが爲めに、大和大納言秀長・羽柴中納言秀次を副將軍とし、六萬餘騎を率して、先づ阿波國に赴き、長曾我部新右衞門が楯籠りし和氣城を攻むるに、新右衞門、降人に出づる。副將軍大和大納言秀長卿、軍兵を進めて、長曾我部元親が弟安親が籠りし一宮城を攻めらるゝに、安親降人となる。羽柴中納言秀次の軍兵と一つに合せて、桑名左衞門が籠りし木津城を攻むるに、一夕雨風烈しきに紛れ、桑名左衞門、夜に乘じて逃落ちたり。仙石權兵衞、兵を率して讃岐に至り、八島の城を攻め落してより、四國、卽ち太平になれり。秀吉、卽ち阿波を蜂須賀小六家政に、讃岐を仙石權兵衞に、伊豫を福島左衞門大夫・戸田民部少輔に給はる。

秀吉、既に征夷大將軍にならんとせらる。權大納言源義昭に語り給はく、義昭は、尊氏の末なり。京

都の公方なりと雖も、天下大に亂れ、威力衰へ給ひ、公方はある甲斐なく、諸國を流浪せらる。公は貴族の末なり。我は卑賤の者なり。願はくは我を養子にし給へ。我れ正に大將軍とならん。然らば公も、富貴榮花を開き給はんとなり。義昭其天性愚にして、是非の理に昧くして、其言葉に從はず。秀吉大に恨みて、菊亭右大臣晴季に相談せらる。晴季の曰く、關白は是れ人臣の高官にして、諸人の仰ぐ所なり。將軍よりは、遙に貴き事いふ計なし。只關白になり給へと。秀吉大に喜び給ふ。

關白に任ぜらる

七月十一日、秀吉、既に關白に任ぜられて參內あり。織田信雄卿・大和秀長卿・羽柴秀次卿・浮田秀家・前田利家・德川秀康等、扈從せらる。豐臣秀勝・同勝俊（大和中納言と號す。大納言秀長の子なり）・池田輝政以下、皆供奉す。

秀吉公、或時毛利輝元の家に至り給ふ時に、源義昭、庭の前に立ちてあり。秀吉公、此有樣を見て曰く、義昭々々、只今はいかに〳〵と。義昭、手を束ねて腰を折り、大に敬へる氣色なり。義昭は、輝元が家に浪牢して、年を送らるゝとかや。秀吉を、養子の分にせらるれば、何ぞ今斯くの如くにあらんや。

五奉行を置く

秀吉公、軍を越中國におこし給ふ。前田利家は、賀州の兵を率して先陣せらる。佐佐陸奥守成政（初は內藏助と號す）之を見て、方々の砦を引拂ひ、越中外山の城を固めて楯籠る。秀吉公、能登國石動山に登り、軍兵を分けて、外山の城を攻めしむ。佐々成政、防ぐ事叶はず、富田左近・津田隼人を賴みて、降を乞ひければ、秀吉公許し給ひ、成政を召連れて京に歸り、越中國をば、前田利長に給はる。

秀吉公、既に前田德善院玄以・淺野彈正少弼長政・增田右衞門尉長盛・石田治部少輔三成・長束大藏大輔正家を、五奉行とせらる。淺野が妻と秀吉の妻は、同胞にはあらねど、姉妹の好あるを以て、長政內外に付けて、預りさばく。前田は、信忠の推擧に依りてなり。長束は、往當丹羽五郎左衞門に仕へて、分別知慮深き事、常の人に越えたり。增田・石田は、秀吉に仕ふる事年久し。中にも增田は、利漢才覺にして武勇あり。前田德善院には、京の所司代神社佛寺の事を知らしめ、長束には、年貢運上の事を知らしめ、淺野・增田・石田には、諸事の法度を知らしむ。大事は、五人相談して定むべし。私欲奸曲酒色に溺るゝ事なかれ、公事の訟訴の事に、賄を取るべからず。

此等の條制、堅く仰付けられけり。

信雄卿、卽ち羽柴下總守勝雅・土方勘兵衞雄久を以て、東照權現に申遣さる。我れ既に秀吉と和睦せり。秀吉亦貴殿に遺恨なし。只一時の爭をなしける計なり。此上は、貴殿早く京都に上らるべし。秀吉喜ぶのみならず、我も大に悅ぶべきなりと。大權現、耳にも聞入れ給はず。信雄卿の弱將淺近の智慮を、見限り給ふにこそ。

將軍記第十五終

國史叢書
將軍記一
定價金一圓

大正四年四月廿一日印刷
大正四年四月廿四日發行

編者　黑川眞道
發行者　國史研究會
右代表者　小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地
印刷者　楠山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

國史研究會藏書
複製

發行所　東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
國史研究會

340
3/8

東山縣農林工場

終